



文部科学省国立教育政策研究所
教育課程研究センター
研究開発部 学力調査課長

小久保 智史

こくぼ さとし*東京都出身。東京大学教育学部卒業。平成18年に文部科学省に入省し、初等中等教育局初等中等教育企画課、高等教育局専門教育課、大臣官房政策課、研究振興局学術研究助成課、文教施設企画部施設企画課専門官(平成25年)等において主に連絡調整担当を務め、平成27年7月から現職。平成20年度には、文部科学省の実務研修生として愛知県東海市立名和中学校へ派遣され、3年生の副担任として、学習指導、生徒指導など、学校現場での勤務を一年間経験。

「正答率」だけが大切なのではない!!

「誤答」から見えること

毎年4月に実施される全国学力・学習状況調査をめぐっては、結果の「順位」にかかわる扱いがとく議論されがちです。しかし、それが調査の本来の目的ではないはず。どうすればこの調査を教育の現場に生かすことができるか、平成27年度の結果に見られた傾向と共に、お話しを伺いました。



人間教育学会会長・
学校法人聖ウルスラ学院理事長・
奈良学園大学学長

梶田 毅一

かじた けいいち*松江市に生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科(心理学専攻)卒業。文学博士。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを歴任。この間、中央教育審議会副会長、教育課程部会長なども務める。著書に、「基礎・基本の人間教育を」「教師・学校・実践研究」(金子書房)、「和魂ルネッサンス」(内面性の人間教育を) (ERP)、「不干斎ハビアン思想」(創元社)、「教育評価」(有斐閣)など多数。

調査問題の作成は国立教育政策研究所が行っていますが、まずはなんと言いましても作成する問題そのものに指導改善へのメッセージを込めています。

小学校は第6学年が調査対象ですが、調査問題は学習指導要領の1年生から5年生までの理念や目標、内容等に基づいて作っています。また、できるだけ具体的な場面を設定し、学習指導上特に重視される点や身に付けるべき力を具体的に示すメッセージとなるよう作成しています。

それから、問題作成時には、問題と併せて「解答類型」というものを設けています。これは、単に問題の正答を示すだけでなく、どこで何をどう間違えるような誤答になるかなど、児童の具体的な解答を分類、整理するためにまとめたもので、単に問題の正誤だけではなく、一人一人の誤答の状況に注目して指導改善ができるようにしています。

全国学力・学習状況調査実施後速やかに、教科ごとに問題の趣旨や解答類型、学習指導の改善・充実を図る際のポイント等をまとめた「解説資料」を各学校にお送りし、分析結果が出るのを待たずに、調査実施の直後から学校ごとに分析を始め、指導の改善に結び付けることができるようにしています。



作成する問題そのものに指導改善へのメッセージを込めています。(小久保)

梶田 そういった意味で、問題そのものが学校現場の皆さんへのメッセージだというわけですね。また、調査結果についての最終的な分析の中にも、メッセージが込められているわけですね。

小久保 そうですね。調査結果の公表に当たっては、教科ごとに「報告書」を作成し、正答率のみならず、解答類型ごとの反応率や、課題、学習指導の改善・充実を図る際のポイントを示しています。

ただ、どうしても「報告書」は分量が大変多くなってしまい、なかなか学校現場の先生方に手に取っていただくの

は難しいという声も聞いております。

平成21年度からは「授業アイデア例」を作成し、調査で課題が見られた事項について、授業の改善・充実を図る際の参考となるよう、授業のアイデアの一例を示しています。当初は「報告書」と一体化していたのですが、24年度からは現在のように報告書から独立した冊子として配布し、日々の教材研究や学校・教育委員会での研修会などに活用いただけるようにしています。

さらに、24年度からは「全国説明会」を実施して教育委員会の皆さんに調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実等について説明しているほか、当研究所の学力調査官などが教育委員会の研修会などに伺い、指導・助言を行っています。

全国学力・学習状況調査 どの段階でも課題が見られる 資料の読み取り考察活用表現

梶田 昨年(平成27年)の4月に実施した全国学力・学習状況調査の結果からは、現在の子供たちの学力や学習状況について、どのようなことが見えてきましたか。

小久保 全体的に見ると、A問題(主として「知識」に関する問題)に関して

全国学力・学習状況調査 作成する問題そのものが 指導改善へのメッセージ

梶田 全国学力・学習状況調査も、もう8回行われてきました。もともと、単なる「学力の実態調査」ではなく、その結果を、授業や生活指導などの改善につなげ、子供たちに学力をしっかりと付けてほしい、人間的にしっかりと育ってほしい、という目的があつて、始められた制度です。

そういった中で、現場に授業改善のための資料を提供し、指導事例を発掘してフィードバックしているのが、国立教育政策研究所の学力調査課のチームです。

そこです。現在、国立教育政策研究所では、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、現場に対してどのような発信をしていらいっしょなのか、ということから伺いたのですが……。

小久保 全国学力・学習状況調査は、おっしゃるように、国や地方公共団体の施策の改善、そして何より、学校現場における指導の改善に役立てる、しかもそれを一度で終わらせるのではなく、改善サイクルをつくるということを目的として始まりました。

は、個々の課題について改善が見られたものがある一方で、B問題(活用の問題)では全体的に課題が見られました。この傾向はこれまでの調査と同様です。

教科の個別的なところでは、例えば算数の割合に関する理解(B問題②)などに課題が見られましたが、各教科を通じて言えることとして、資料などから必要な情報を読み取って、分析、考察し、さらに、自分の考えを書く

「平成27年度 全国学力・学習状況調査」から見えてきた課題① 「割合」の理解に課題……

2) 次に、せんごいを買います。家で使っているせんごいが、20%増量して売られていました。増量後のせんごいの量は480mLです。増量前のせんごいの量は何mLですか。求める式と答えを書きましょう。



20%増量した洗剤の容量を示し、増量前の量を求めさせる問題。正答率が13.4%にとどまった。また、中学校の、水溶液の濃度に関する問題でも正答率が低かった。さらに、割合の理解に関係が深い、単位量当たりの大きさを求める問題についても正答率が低かった。このように、学校種や教科を越えて、割合や単位量当たりの大きさについての理解に課題があることが浮き彫りになった。

平成27年度全国学力・学習状況調査 小学校第6学年 算数 B問題②(2) 場面の読み取りと処理・判断(おつかい)



細かく申し上げますと、「資料から必要な情報を読み取ることに課題がある」「情報を読み取ることはできるが、一つの資料から情報を複数取り出したリ、複数の資料から読み取ったりすることには課題がある」「読み取った情報をもとに表現をすることができないが、その中で情報の引用ができない」など、情報の読み取り、分析、考察、表現といったそれぞれの段階で課題が見られたといえます。

「目的」というのは非常に大切なことですね。次の学習指導要領ではアクティブ・ラーニングが重視されることになり、単に子供の発言が多いとか、話し合いが盛り上がっているといったことや、教師はできるだけ発言しない方がいいなど、見かけばかりが重視さ

「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。また、B問題③では、学校新聞を題材として、インタビューした相手の「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。

「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。また、B問題③では、学校新聞を題材として、インタビューした相手の「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。

「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。また、B問題③では、学校新聞を題材として、インタビューした相手の「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。

「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。また、B問題③では、学校新聞を題材として、インタビューした相手の「話した内容」と「表情や声の調子」に関する情報をもとに、インタビューの様子を記事にまとめるという課題を出題しました。

目的意識を持たせることの重要性が再確認できたように思います。(小久保)

問題解決力を伸ばす授業を進めていく上で、非常に重要なことですね。(梶田)

「平成27年度 全国学力・学習状況調査」から見えてきた課題④
資料の活用と表現に課題……

図の読み取りはできて、【文章】の [] 中の文章の結論である「折り合いをつけて決めていく、または「ゆずり合って解決する」という内容を取り上げて書くことという条件を満たしていなかった児童が30.2%いた。また、「じゃんけんで決める」や「先生に決めてもらう」、「こうたいです」など自分の経験と結び付け、具体的な方法を書いた児童が見られた。

「平成27年度 全国学力・学習状況調査」から見えてきた課題③
資料の活用と表現に課題……

インタビューの様子をまとめた資料を用いて、学校新聞の記事をまとめる問題。「話した内容」と「表情や声の様子」の両方を取り上げて書くという条件が示されたが、一方しか入っていない誤答が多く、反応率は50.1%。国語に限らず、資料の読み取りやその引用、考察、それをもとにした表現に関する部分に課題があることがわかった。

「平成27年度 全国学力・学習状況調査」から見えてきた課題②
「引用」についての理解に課題……

コラムの中から、筆者が引用している部分を抜き出す問題。正答率が20.0%だったのに対し、「子ども読書」「世界本の日」「七口弾き」と答えた児童が合計23.2%いた。これは、「引用」した場合はかぎ(「」)で括弧ということについては捉えているが、引用の必要性や効果考えた上で引用している言葉を判断することができなかったものと考えられる。また、設問における「自分の思いや考えを根拠付ける」ものを、5のままとりに書かれている筆者の思いや考えを述べているものと誤って捉えた児童も多かった。

系統的に育てる 物語の読みの力

～これならできる！ 小学校6年間の指導計画～

二瓶先生
待望の新刊!
3月刊

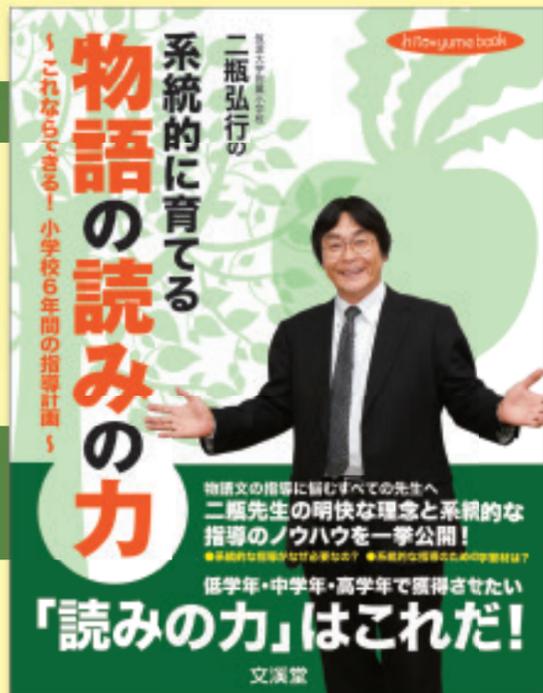
物語文の指導に悩む先生へ

二瓶弘行先生の系統的な指導を伝授!

子どもたちに自力読みの力を獲得させるには、
1年から6年までの学年の発達段階を踏まえ、
系統的な指導を行うことが欠かせない!
二瓶先生の系統的指導の明確な理論を大公開。

明快な理念と系統的な指導を学べば
あなたにも二瓶先生の授業ができる!

●B5変型判:128ページ
●定価:本体1,600円+税



好評発売中

二瓶弘行の「一日講座」既刊シリーズ

●B5変型判:128ページ
●定価:本体1,600円+税

1 説明文一日講座



説明文の授業づくりが
バツチリ!

2 物語授業づくり一日講座



物語の自力読みのコツ・
ノウハウを伝授!

3 対話授業づくり一日講座



話す集団・話すことが
大好きな子を育てる!

4 物語授業づくり入門編



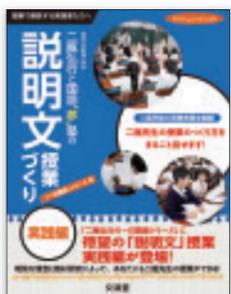
物語授業づくりの
ヒントが満載!

5 物語授業づくり実践編



見えないものを見せる
手立てを伝授!

6 説明文授業づくり実践編



授業づくり、教材研究の
ノウハウを伝授!



調査の結果、分析、そして問題そのものに込められたメッセージを生かしてほしいですね。(梶田)

カジタは
カンジタ!
現場感覚を
生かした
「メッセージ」に
期待

全国学力・学習状況調査という、順位ばかりが目立がちですが、調査を通して学習指導、生活指導をよりよいものにしようというのが、本来の目的です。そういった意味で、「出題する問題そのものに、現場の先生方へのメッセージが込められている」という小久保さんの話はとても重要な指摘だと思います。小久保さんは1年間、公立中学校に勤務し、実際に生徒たちの学習指導、生活指導に当たるという研修をしておられます。その経験が、子供たちの学力向上には子供と先生との関係、向き合い方も重要、といった現場感覚を生んでいるのだと思います。

梶田 厳密な因果関係についてはさらに検討が必要なのだろうと思いますが、そういった活動と学力との関係が見えてきたことは、とても興味深いことですね。
小久保 そうですね。ただ一方で、先ほどのアクティブ・ラーニング的な学習に関する質問に対して「よく行った」という肯定的な回答は比較的多かったものの、その結果として十分に成果を上げている学校もあれば、必ずしも目指す結果が得られていないという学校もあったようです。アクティブ・ラーニングを意識した授業を目指していく

梶田 なるほど。私自身も全国学力・学習状況調査の結果が上位のところと、まだまだこれからというところを比べてみて、単に学習内容の違いだけでなく、学習規律——例えば授業の始めと終わりをきちんとさせているかどうかといった違いを感じていました。そういった面で子供たちに対してよりよい指導をしていたために、全国学力・学習状況調査の結果、分析、そして問題そのものに込められたメッセージを、全国の先生方に生かしてもらえたいですね。

れることもありました。それでは学力に結び付かないですね。結局は、どれだけ自分の中に必然性を持った課題意識が育つか、どれだけ自分の実感で自分の本音で考え、話し合っ、自分なりの納得ももっているか、といったことが大切なことです。
小久保 その通りですね。目的意識がないままでは、子供たちは「何を、なぜ学んでいるのか」と疑問に思ってしまう。子供たちの発言も、まずは自身の中にベースとなる考えがあり、それを誰かに伝えたいとか、周りに意見を聞いてほしいといった場面に促されるからこその生まれるものから、先生の側がそのように指導できるかどうかが大切であると思います。
全国学力・学習状況調査では、質問紙調査において、今回新たにアクティブ・ラーニングを意識した質問項目を設けました。学校質問紙の、「授業において、児童生徒が自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れたか」「学級やグループでの話し合いな

どの活動で、自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思うか」といった質問に対して、肯定的な回答をした学校の方が平均正答率も高いという結果が見られました。
アクティブ・ラーニングというものがどのようなものかということについてはこれから引き続き、さらに議論を深めていく必要がありますが、学力観や指導に対する考え方の変化というものが調査結果へも表れているのではないかと思います。

全国学力・学習状況調査——
学習規律も
学力向上に関わることを実感